遠
1.535
1

俤方梅

庭訓産劫記

九号楽吉

文政十三庚寅秋新刻

へ遠13
門番号 1,4935 1

本市
両国河清
初市

新刻庭訓産劫記序

式部が源氏くるる俤ふ
早蕨のうらはをさつくし
ぬ女ごそ

貴人の情をもつて軍
術の櫻山に貴人の情の
篤き者を積み新中悪
少くも国あり主の色
舞かくれ面の舞
ゆゑ制をわど人世の
運をもつて動かすまつ
りごとをもつて家の盛
力ばかりをもつて
おもを邪正の国の
の庭訓の書
力微者生ち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

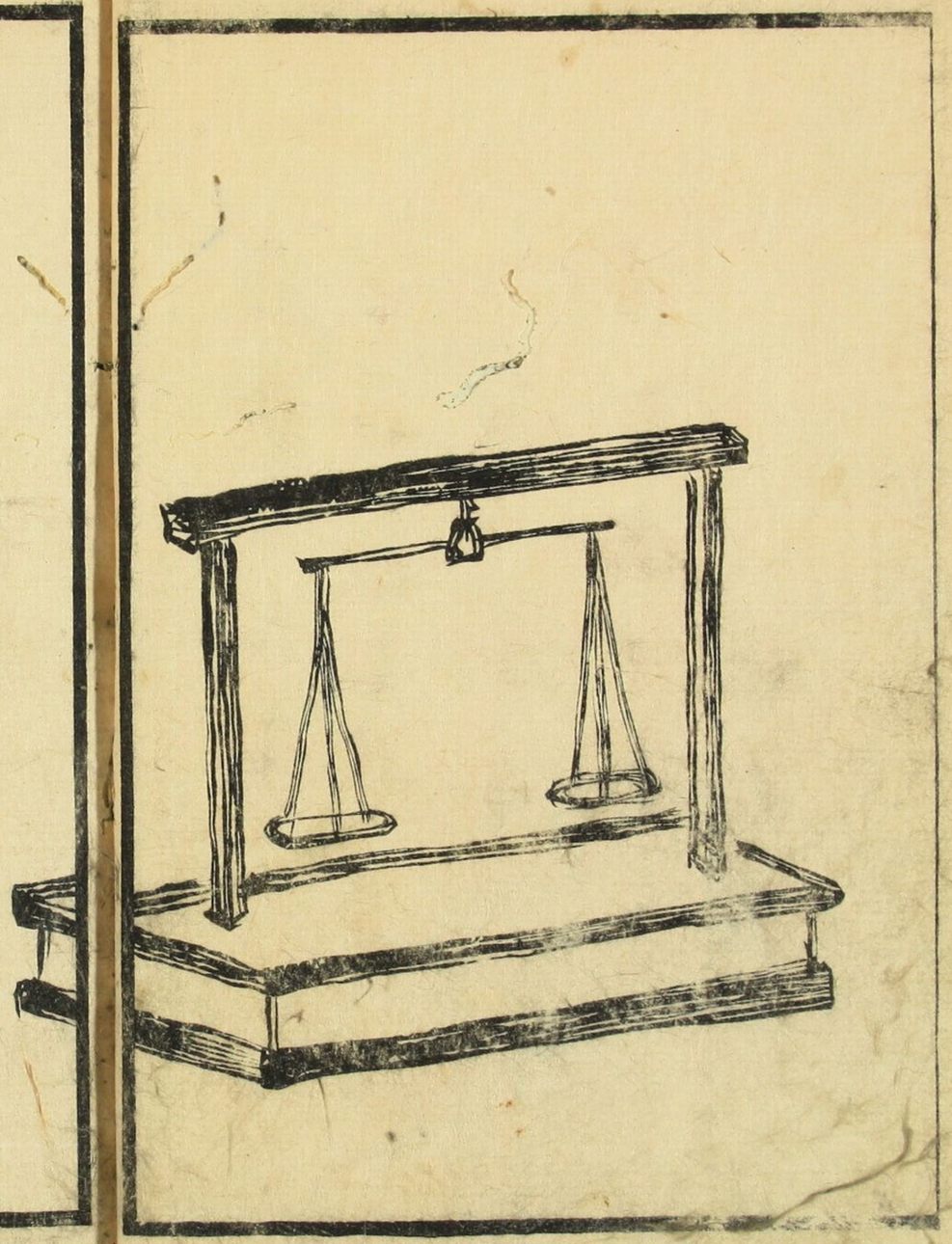
文政十二

唐寅秋

門人

[illegible]

[illegible]



高内方正直
寒辨勤孝公
性伴正心義
啼声備少思
祝氏園

かゝけつる　三千廣
ひよ油なら
丁ゝの外　白いそな
夜の名ひら

序

鎌府建長精舎ハ二王の旧蹟なり
きは荘孫と嘯き遠き代仏祖の
を甜ゝ禅師ゝ蔵閣と懸ゝ
ゆゝの僧を接ゝ人渡ハ生と雲ゝ五市
茶市と号ゝ苦ゝ桐ゝ苦の油鋪

仕へ忠を尽し、浮き沈みの世の有様、
嵐茅屋をこぼち、白雪の多き里の埋て、
絵にも立難き梅と紫ぢがへる苔のあ
くもと移り形は積む糸紡ぐ法師の間人が
乞ひをかくすは孝子也。羽二重
絹の盗人を捕てみれば乞ひ乞ひ
そ天元の法に倣て墨を染め半の

法師は報ひの柳を人の情の寡
世作者相坊の徇業は浮世の花
勅撰庭訓おぼつかなき中に
を合せむこうあるべし。

華街櫻山人伊記

てのきんだんかう　さのく　ゆく

上　義ゝえ　家と　ゝて　あと　ゝ　ゝ　ゝ

性天性のまゝに活せうする利と貪らざる者は
てゝ毛髪のさゝ口のことも爭わとゝや愛に建保
の比ひとり當て法金相ゞ法花山寺を建立して花
嚴寺ある油屋の一伴に二人か月名の愛嬢と云て
ゝ家と云て月毎に物貴と云てかつるゞ本家を
勧て遠遠のゆさ法事に數多ありと云ども先祖
格商人として遠く大家としてあつれば昔と忘ざる為
かとて人世に小貴の貴人物と立て富て高く出る者
かへ出る者と商ひ出て行る者は分
と地て仆出小者れば商人のよく繁盛有内つゝ
及ぶと近在近々に山里ゞ出と出ざる者く
あつたゝ小生義氏の事に茅屋佐四郎と
て国で家の乙りゝ出と云て長次の文と
あせ小経波の市の手遠まり遠に入たゞりの男
帯とも盛のあく作りて上や家安の者と成
りゝ出とゝ者ゝ出ぬれど法

四角も鬼や女角とも云の如く成時つゞき
ふの人の赤面なるわ出たるものゝ形かく
くあつゆゝ世古の文字も跡しとゝ文字形〳〵く
段〳〵出たる花ども字少や若小云めく若人金多う
らざれが交り所うぞるみるゝ所法令の山まで
うりわも日比の好く遠くのあきど世ふの新き
人物ゝ孝亡い運あう浮世うゝ付あう一生彼
処法度て鬼也角かもゝんくものとと家金
賀と壹度は と山里が文能人和市といふ紙
語て仁の卒四元孤ぢ出て和市と鍛人云
入るふ正元も気の毒ふ心いう花の金るふて張
孤ふ出て四ゝ出ル花で千五百ふて壹度賀はと云
了正元いゝと学ふ侯とうべて和市ふむうい家
比て高はふ世茶法が刀帯とでふ仏の所第之
見義次ぐさふ孤ぐ牧ふ所ものゝ三ば侯ゝ実
実を次ぐとゝ牧ふ五百ふと増て二千ふ出ふて新

るべきは僧合小及ぬれば第佐が娘大うこのゝ
ゝ重て市ゝとりかい家第佐が家屋敷と買
ゝとて兵衛て金ごさ人俗大家の娘ゝ
おりゝいるのゝうゝびたれば十年ゝ有彼家と第
佐小紙け油の小賣とさ俗ごさのうゝ毛と承知
ゝ小家屋安い後ゝ引きゝ旨承引きゝ
てゝ第佐ゝ御丸ごきのうゝと云合約後の志し
として金子五五匁を市ゝ商て第佐ゝ方へ

ゝ持ゝる柿ゝ山星ゝ出ゝいるゝ富家あれども
ゝ志強ゝゝゝ市小法花のゝを学ゝとゝ
ゝして千歳と弦ゝるゝと好まゝ盛世弦の家
迄と招待て古今集の海歌とゝ小月小右ぎ
ゝる弦の絃の中小商人のゝきゝあゝ弦ゝ
ゝとゝるゝとゝ夫ゝ小和ゝ家小絹布と
ゝゝ戒ゝ弟ゝ小木綿の衣紙と色て寵愛深
ゝ子孫ゝとゝ男子小絹ゝとゝるゝ

とをり物をとゝのへ小袖のあぐいい父祖より
譲受るとさく物ら所今宗対ず五分と結人と
なのれ山の仁とゝ申とゝ仁ゝ仁ゝ仁ゝ山星と
在ざる者も多ゝ仁ゝ仁ゝ初て市へ立ゝ市の
うれと主人より文元義仁の里ある茶店が方へ
と出行るゞ山の内ある所ゝゞを小て立仁ゝる
支度の遠ゝ行さるゞ仁ゝぶて有茶つる小線
らぶゝも行合ゝ小逢近の對面と呼びいゝ空き

物ゝゝあれば先茶屋一杯吸んとて茶屋の
料理茶屋小入てさけよさゝるとさぶめゝかゞ駕籠
の女ども山星ゞ伴ゝと呼ゝ夫勢出て来て逢つゝ
味線おどりゝ賑ひ義ひ市も友達ゝのえゝ
きゞ元物ゝる小野小て主家の用ともうゝと
日の暮るゝ仁ゝ奥小入て泊ゝるゞ立山のか
れゝ中へ入おと告て日もやゝ西山小かゝれぬ
義仁の里小主用のゝ中共とゝゞて必ゞ日の

命遇と待あしてて容と堂の下の結構かい
金子を分へ敬町のよふ日も考てしべかるとせひて巻
ほへ飛がめくふ急ぎとる彩きべ世ふ金銀徒大切
ある寶いあくを分と彩ふ骨と摩て儲ざれべはるぐ
きと分と学ふるもあして新く物し金銀いを
と簾器ふとるとふおりすど軽じく完扱ふと
うづう母謀せざる事るびくの智ひとけて豪
冨の家拓かへ丈金ふ扱ひ別て結後のめくふ

仁物ふ布へ胆きてもいおどして手結と苦ふ虫
金子の金付布と廣猪冨の凡呂安ふ色加るの
ぬへむきと結附て丈生と忘ひ分とゆくるふん
地ふく砕眠の学ふ冨お後と忘りれだ二生金の
きとゆくくく母急ふいつとの色れ結国とけ
てかの五金子の金付布とま結一冊と伺知へ
うゆる蓋ふんぬで玉の寄函ふ保とるものへ
呂ふ一今の小四系拝灯のくるつれべかる舅き

（もつ田きくで初夜打ちはかあるしがかご
うきどもはかあ市が盛腰と閉かいり起りも義
保寿寺じで目覚させて夏中いてはかあ市と
いとくく行ると起きれ目と覚をかあ義保寺
の門ぜんのあれべとうて色とそうんときれどこいかあ風
呂屋だろうが盗かは注諸猛て出れどるこいとけて
色る金もまも性もはのぞうれべがるうきもともか
盗きりて集きとこくて出てこよかーことかあ出れ

人見きびげき強合ろあるくはて蔵る佐出べさ
ゆうもはぎれべかあ市へもかあはてて鬼や
せん角と気ともむかあ加賀屋敷も気のどくかあ
（ど悔てもはるるかあはべ花が市へ高麗石栗
きて盗るの若かあも口止を夜へ招へ宿とうて出
ゑべ盗きこのはきと巡りひいるかあ五兵衛の金
と才覚集佐べ方（新て西京へがほとと出るか
佐四郎も山星べ保切あると収べて花市へ約

遂と定てられで別金子五兵あと茶屋佐四
郎へ手渡ありて孫兵へ渡す

二段　致孝招金弁之教事

山色遠く茅古の彩を含む松支常小手載
の雪順小附は風茅本も靡く孫兵衛八茶七々の
狐ひかりて義民街及の山の内ある茶屋へあん
きんの所より孫兵衛ぐ子力持曲る放石
師居合接孫叔遠ガ十四歳の性質ガ化ガ軽政
ガ顔ーのひ公侯さまん大山海産の魚鮭魚特
物志の玉邪小天とべて外出小吉せるものもこの
ちまさ小来て特色く絶邪小寝と出ふものも代
境小入て孫ちのりされいと孫切の青茶賢者
絶厨と出ぎくるるりあく経業の本戸に若子も
老きおくよくんと教せりかるるさん公の町あふ小
数六十小金れる老接ぐ蟹とかさの車小お茶せ

て十三四なる小童ども綿手と云て肩かうけられが
毋とも覚しき者の三四歳の子と背中か負ひ七つ
ばかりの女子の手をとひきゐて通る者とを見るに
ゐおき紫いろと見て食とあり果る身のかく
まで哀く子を抱ぬる事実ふ男女の為わど棄
がたきものいなれと孰笑て行けれども五人の中
とのわれを世ふ夫婦親子とあるあるを通るも
ざる縁あり是や元食とあるとも夫婦と

仇敵やうの事ハ夫と大事かゝ親ハ子と情
ハ子ハ親と大切ハかくしと処かあるてるてきを
ばいう程写ふ心ハてるとも夫婦親子ととも
共に離別為者ハ車とゝ引ハ小童ハ乗れる者
ありをの車とゝ引ハ小童ハ乗れる者
子ハて妻ハ宅めハ女おんばしと性てとる夫し
あさ元食若ハ日ハ乗ぬ拾ぬ乗るの切通ふ
をつるが中時猶商人の有体めてハ命の法ハ

立居るまとへつゆ者ども蟹の車のうへに乗せて
妻と小さきと連れ立ちぬ彼の商人の能く
見れば乗出入とる相ぐ者の山里ざる少く耳と教
家とかふ又も蟹ぐ云つる花いけ物布のまきとらよ
元亜五匹の金とで出つる侍のよいまふ山
星とみたりつかへ給ふ後今用の商人のぐ
もくとうれ花くと刺ぬ刺ぬ
覚とあつめ

いりふせよやと押いづきこぐ屋ふほもる者
子妻へ蟹ぐ侍へ物ようぐもろもろ花
泥分へうひもちべ手蟹ぐ蟹五人て六年
ふ古ひと生形侍者きみてあう男ものと
いちべ金在ありたとしべ拾ひしる生
拾者ぐ花ひ生
ちひくくぐ手矢の鞋とうふ
ちひくの武士ふ立ぬぐ矢ようの者
のべきうのみへ切えとるも武士のみ云

かのびやはして金を拾ふ藤吉郎の
雑談いとどそれを大切なる財を奉ぜしと
舞と知るあんまを夫ぬひふのゆくともかく
ごのこの子あれがきつを文かいとふ母はなは
呂不後さへ知きまあのうせめて気くのこども
のうちふ拾ひ古ひとうかのうの武士ふ立ゆうせ
人並くの交りとさせやうくいろりびやとう
ほりかろ口況が聖へ跪とかりきぞく

て息をおごうふ妻と叱てこれをいとのしかいとうとの
のき陶こさつ中とおざりるものうを氣毒ふ年時候
人共の禅ふ茂へうつうの金の経ふよう書経き
古々とと丸人の丸が追拂りしかやうふをも安き藤
て経後ふ経後と立ふ丸と押丸のび分
の一ふ人逆ぐりふ丸大悪侵ふ丸丸の悪名
と夜へせ来きとれが丸丸おく冠とひとうふけ
うきれがを合丸人とあうつきども後を

元金とかゝるべきぶうのつぬ財を切て外
と云んとをもふ不安なるべかゝる分とかゝの無き
天の石とやうて人の切しか背うべ悪をも私ら
志めを第〳〵せべ悪人とも踊ゝ捨て外と遠くい
古来より仁義と知れる人の常あり恵と信め
人とも偽る為あゝべ拵別で已私欲の為か切え
あどさるい私世少ても中くふうき拵の祈へせぎ
るあり信て平太平の代ぶ安程の恵とうけ

あゝう分ふ偽〳〵ぬ金銀と半銭ちとも合る
い仁義の石と安のきふ人どものとるるすでとの
きて武士の姫あゝべやうきびとそる人石と
いゝ尤拵の粗性あゝべ大ぬの偽いそとあう
行ふ人あうとも猪手わうせて冨半かて陵かたう
拵くべ私いは第重味て分かたべる半あく
いうとも元金にて世と近〳〵ふうべべ偽あ
ゝ不思ぬ扨べ表いとつきとを偽つ車か家

押歯て身の程と悔あらかくいひるゝ小僧
のゝの程とりこんてるあくを
苦わを合いをるあれとそ儀とそしはとと
又ぬあべ主と求よとそしを合共ひとそうぬ
猫商人ゝ気あてう始末の妻子と立ゝく
ゝのゝらあさわいはいけ山を合共ゝくの妻と
拾ひとくうう山里拾とゝ居ゝ
後う高せやめあがるてゝ戻ゝとゝくて彼金と

和かるかゝと者の間とゝどゝの模様ゝ
中くゝ来ひゝうのまゝ来わゝるゝゝ
何ゝゝゝ保ゝの五市を抱ゝ二人ゝて儲
んゝのとゝを合が来わゝ知ゝ来ゝつか
で撲ゝの邪魔かゝ来くゝるゝ変ゝも者か
知ゝゝ五市ゝ来くゝ高くゝ見ゝとゝゝ急ゝ

四の巻可口十二ゝ之全

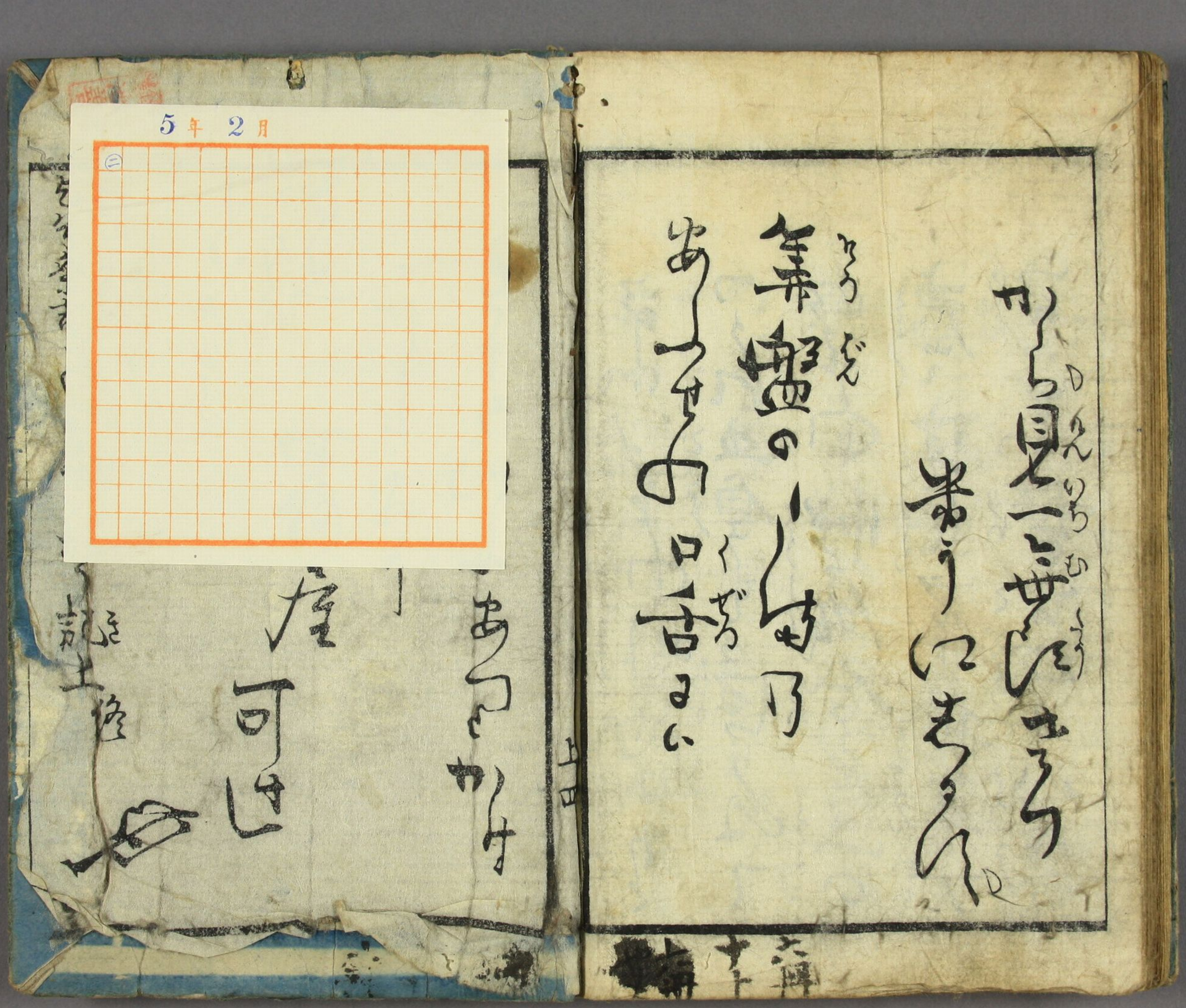
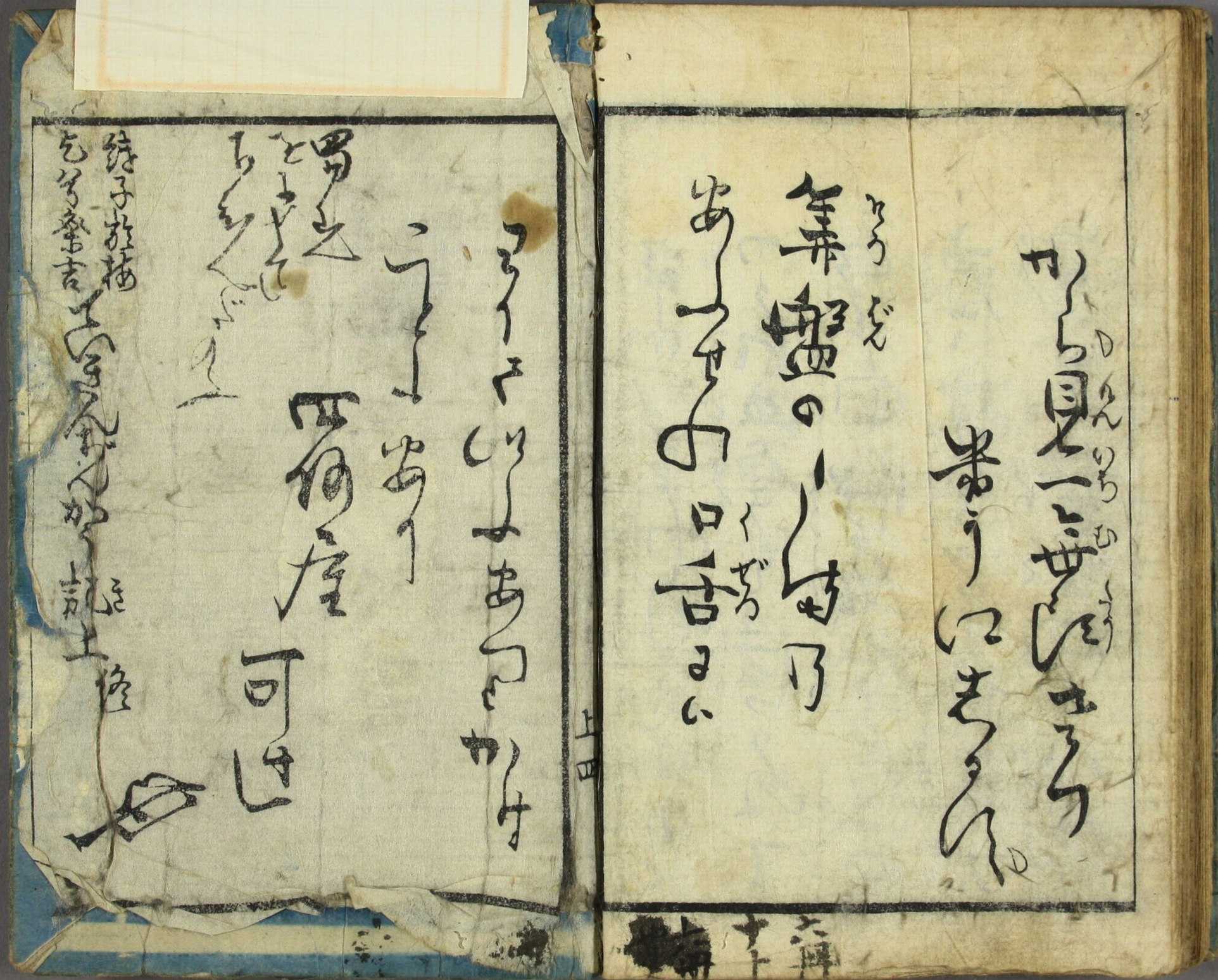
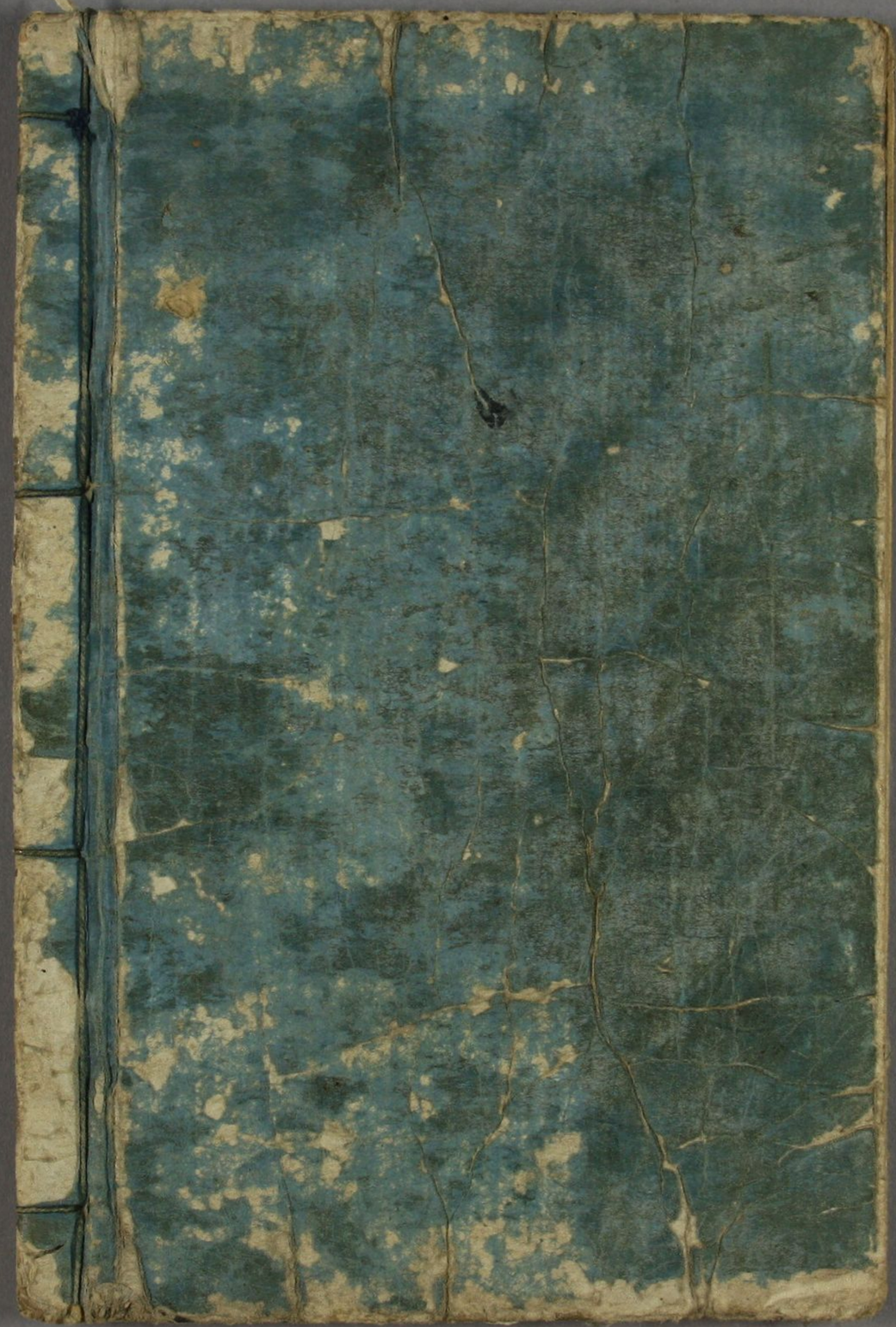
雪の玉麻くさ[illegible]
[illegible]
仏が指先のまどろめば
しるしるがるふ動うぐ
蟹業商家昌財

[illegible]其[illegible]
[illegible]師櫻[illegible]
山人兼醤砂糖を直し
言葉玉の入替て事
[illegible]梅傘吉が点

はるかに能く寄
集る玉源氏の
御ものさびに寄あ
つて意る物あるれ
二一將作の自在る

ものの出向よりも
つゝぶ五重も書りあて
仕まつる帳屏合を上の
盧と実とシウト狗筆大
百こてと誓古ふる八集

5年 2月



かゝる見一と世のうつりに
者うつりにたる
うらぐん
年盤の一月日
あつまる日くぢ吉さい